

はれ、ときどきぶた

ぼくの名前はヤス。小学校3年生だ。先生から毎日日記を書くように言われて以来、毎日欠かさず日記をつけている。

ある日、早く家に帰ると、母さんがこっそり、ぼくの部屋で日記を読んでいた。ぼくは、「ひとの日記を読むなんて！」と、どなったけど、母さんは気づかないふりをして台所へ夕食の準備をしに行っちゃった。

「母さんは、まったくこりてりないな。」とぼくは思った。そこでぼくは、ある作戦を思いついたんだ。「明日のできごとを日記に書こう。」どんなにでたらめなことを書いたって、未来のことははだれにもわからないから、母さんにも、うそだとバレないはずだ。そしてぼくは、すぐにこう書いた。「6月7日(日)。今日は、午前中は晴れていたけど、お昼前にぶたがふってきた。」ぼくは、思わずニヤリとしちゃった。「母さん、これを読んだらびっくりするだろうな！」

よく朝、父さんがテレビの天気予報を見て大さわぎしていた。「大変だ！今日はぶたがふってくるって言ってるぞ。雨がさはあるけど、ぶた用のかさを持ってないなあ！」

ぼくは、だんだんこわくなってきた。「まさか、ぶたが本当に空からふってくるなんてことはないよなあ。」と思った。ところが、まどの外を見てみると、空の上の方から、なにか鳴き声が聞こえてきたんだ。「ブーブー…ブーブー…」

「たいへんだ！ 本当にぶたがふってきちゃった！ ぼくは、世界中を大こんらんにしちゃったのか

も！」

ぼくはおおあわてで日記帳を開いて、力いっぱい、そのページの文字を消した。「ぶた、ぶた、消えてくれ！」文字が消えるまで、何度も何度も、消しゴムでこすったよ。そして、そっとまどから顔を出すと、ただ、すみきった青空が広がっていた。ぼくはほっとして、息をはいた。

たとえ、きみの母さんが、こっそりきみの日記を読んでいると分かったとしても、日記には本当のことを書くことをおすすめするよ。

だって、ぶたが、本当に空からふってくるんだからね！